

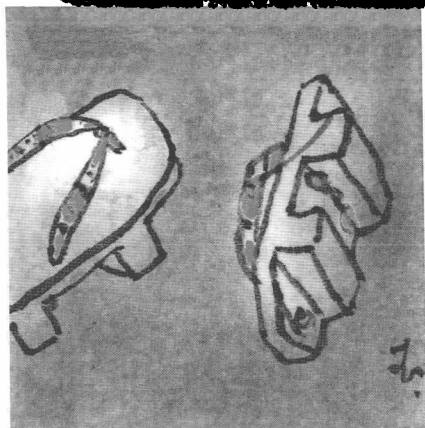
幸福の里

佐藤愛子

幸福の里

佐藤愛子

江苏工业学院图书馆
藏书章



読売新聞社

著者紹介——さとう あいこ

1923年大阪に生まれる。甲南高女卒業。

1969年『戦いすんで日が暮れて』で、第61回直木賞、1979年『幸福の絵』で女流文学賞をそれぞれ受賞。

著書は『我が老後』『風の光景』『なんでこうなるの』など多数。

幸福の里

著者——さとうあいこ
佐藤愛子

編集人——梅田康夫

発行人——伏見 勝

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 一〇〇五五

大阪市北区野崎町五の九 一五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一 一八〇二七一

名古屋市中区栄一の一七の六 一四六〇七〇

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——一九九七年(平成九年)六月十一日

© 1997, Aiko Satô

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

日本音楽著作権協会(出)許諾第9704946-701号

幸福の里 目次

忠義の番頭	5
こんな母親	35
ピリオド	61
幸福のかたち	95
ひとりぼっちの養虫	141
乙女の祈り	177
退屈の咎	203
幸福の里	228
あとがき	230
初出誌一覧	

装画 村上 豊
装幀 中島 かほる

幸
福
の
里

忠義の番頭

「定吉ツとん、ちよつと来てんか」

と呼ぶしゃがゐれた声が奥から聞こえてくると、定吉はげんなりする。いや、この頃はげんなりを通り越してゾ、ゾーとする。ゾ、ゾーとしながら、

「ヘイ」

打てば響くように大きな声で答えるのは、十二の時からの習慣である。

「なんぞ、ご用で？」

小暗い廊下を横切つてふすまのひざの前に膝をつき、

「ごめんやす」

と襖を開ける。

「すまんけど、手エ揉もんどう」

八畳の座敷の床の間寄りに敷いた蒲団から芳野の声がいう。古代紫の絞りの掛蒲団に埋もれて顔は見えない。

「ヘイ」

定吉は畳の上にいぎつて芳野の顔が見える所まで行き、

「お加減、どうです」

といいながら掛蒲団の下から出てきた手を取り、いつものように親指の腹でまず手のひらの真中を押しながら、ガイコツやな、まるで、と思う。

「定吉ッ-ton——」

「ヘイ」

定吉ッ-tonという呼び方は三十年もつと前、定吉が十二でこのいずみ屋の丁稚でっちになった時の呼び方である。今は京都のどんな商家でもそんな呼び方はしない。第一、丁稚などどこにもいない。だが芳野は昔のまま、今は番頭になっている定吉を「定吉ッ-ton」と呼ぶのである。

「吉川さんの初釜のお衣裳、もう出来できましたんか？」

「ヘイ、三日前に出来て、今日あたりお届けしよと思てたところでおます」

「えらい早う出来たんやな」

「ヘエ、普断、何かと氣イ遣うてますさかい、川上はんもうちのは早うしてくれます」

川上というのはもう五十年ものつきあいの仕立屋である。

「そうか。そんなら、今日、届けはるのん？」

「へエ、ぼつぼつ出かけよかと思てたところで」

「そうか。そらお楽しみやわな」

「へ？」

芳野の頬骨の上の落ち窪みの底で、小さな目が意地悪そうに光つて、

「昨日、^{きんろう}蛸薬師のキヌ子さんが見舞いに来てくれはつて、その時いうてはったんやけど、あんた、吉川の奥さんと何やしらん、仲ようになつてはるねんてなあ。ほんまどすか？」

——吉川さんの奥さん！

「なにいうてはりまんねん。よりにもよつて吉川さんの奥さんやて……あのお方、若造りやけどもう還暦やおまへんか。わたしより十二も年上ですがな」

「けどこの頃は年下の男はんがはやるというさかい……」

「なにいうてはりますねん。レッキとした弁護士の旦那はんがいてはりますすがな」

「旦那はんいてはったかて、色恋の道は別やろが」

「おいとくなはれ、アホらしい……」

「そうか……ほな、ただの噂？」

「決つてまんがな。なんでわたしがそんな、道ならんことを」

腹に据えかねる、というように手のひらを揉む指にちよつと力を入れた。

「けど、あんたかて、アッチの悩みおますやろ？ 四十八まで結婚もせんと」

「なにをいわはると思たら……」

定吉は苦笑して、

「あんなもん、習慣ですわ。せなんだらせんですみます」

「そんなもんやろか、男の人でも？」

「そんなもんですが……わたしは心が伴わんとそんなこと出来できしません」

「あんたの純情はようわかつてるけど……けど定吉ッとは男前おとなやから女の方でほつときまへんやろ」

「なにいうてはりますねん。杉本はんの例もあるさかい、氣イつけてますねん」

「杉本はん」は前にいた番頭で、木屋町のホステスに誘惑されて、一千万円近い衣裳代が貸し倒れになって店をやめた。

「ほんならあんた、女おんな知らず？」

「ヘエ……知りまへん」

「嘘や、嘘……」

「なんでわたし嘘つきますねん。こんな嘘ついてもしようおませんやろ。四十八にもなつて、差かしい話ですがな。もうわたしはお店一筋で。十二の時からのご恩がおますさ

かい」

芳野は満足そうに口を嚙む。それから、

「今度は背中」

といった。

「ヘイ」

反対側へ廻って「失礼します」と掛蒲団の下に手を入れる。洗濯板やな、まるで。去年の今時分から思たらまた痩せはった、と思う。去年の今頃、背中撫でながら「もう長うないな」と思ったものだったが、今年は、

「かなわんなあ……」

と歎息が出てくる。考えてみれば、一昨年おとしの今時分もこうして足腰を撫でていた。芳野が寝ついてかれこれ三年半になる。雪の日に庭先でひっくり返って大腿骨を折って手術をした後、無理でも起きて動かさなければそのまま固まってしまったら困りますよ、と病院でいわれたのに、億劫がつて寝てばかりいた。

起きて起きられんことはない、誰やかてジューと寝てて、あれ食いたいこれ食べたいいうて、足腰さすつてもろてたらそら極楽やわ、と手伝いの道子は三日に一度はいう。ああして寝ていられるのも定やんがいればこそやないか。お蔭さまやと感謝して月給やボーナ

スを弾んで犒^{ねぎら}うのが当り前やのに、店をやらせた上に足腰揉ませてコキ使っている。またそれに対して定吉やんがヘイヘイいうて従つてのを見ると、奥さんと定やんはただのカンケイやないな、と思えてくるわ……と、しゃべるにつれて道子は次第に興奮してくるのである。

「蒲団の下で、どこ揉んでることやら……」

にくにくしげに睨む道子に定吉はいった。

「揉むもなにもガイコツのどこ揉むねん。揉む肉あるかいな。さするだけや」

2

定吉がこのいずみ屋呉服店に來たのは小学校を出たばかりの十二の春である。当時、染屋をしていた定吉の父が賭事とホステスに深入りして店を失い、一家は離散した。その時、いずみ屋の当主だった芳野の父が温情で定吉を引き取ってくれた。店の掃除や取りつきや細々した用事を手伝いながら中学校を出してもらい、そのままいずみ屋に居ついて番頭になった。定吉がこの家へ來た十二の春は、芳野は二十になったばかりで大番頭の神田が芳野の婿養子に決った時である。その頃定吉は芳野が鞍馬さんや伏見稻荷さんに月詣り

するお供や、花見やら芝居見物の弁当持ちなどをさせられていた。鞍馬さんを出た所の茶店の床几に腰をかけて春は鞍馬団子、夏はカキ氷を食べさせてもらうのが嬉しかったものだ。

「うち、神田さん、好きやないんやし」

団子を食べながら芳野はそんなことをいった。

「一人娘で損やわ。のれんのために結婚させられるんやもん……」

うちに好きな人がいたら、手に手を取って逃げるねんけど……と芳野はぼんやりと空を見上げながらいった。

「手に手エ取って逃げるやなんて、芝居みたいですね」

定吉はお義理の返事をして、後は一心に団子を食べる。暫くして芳野はいった。

「定やん、あんた。うちのこと好きやろ？」

「へエ？」

定吉はびつくりして団子がのどに詰まった。

「前から薄々、氣イついてたんえ。そやかてあんた、うちのこと、ようジイーと見てるんやもん……」

「へエ……そうでつか」

「そうでつか、やて。とぼけてからに、この子いうたら……」

芳野はひとりで笑い、ピシャンと定吉の背中を叩いたので、定吉の食道に詰っていた団子はあんばいよく胃の腑へ下りて行った。

そういわれれば定吉はしげしげと芳野を見つめたかもしれない。だがしげしげと見たのは、あんまり白粉が濃いので、ほんまの顔はどんなんやろと、見届けるような気持で見たのだった。ほんまに京人形みたいな人やなア、と近所のおばはん連中がいつも噂している通りやなアと感心して見ていた。細面のまつ白な顔、細い目、つんもりと通った細い鼻、小さな小鼻、それから花びらの形に紅をつけたチンマリと赤い口。

「あの人形みたいな顔でアレしはる時、どないやろな」

と小番頭がいつているのを聞いた時も、しげしげと顔を眺めた覚えがある。だからいきなり「ジィーと見てたから好きなんやろ」といわれると、定吉はびっくりしてうろたえてしまうのである。

芳野と神田が結婚して五年目、まだ子供が生れぬうちに神田は交通事故がもとで死んだ。定吉が十七の時のことだ。

鞍馬はんに月詣りに行った帰り、芳野はいつもの茶店でふといったことがある。

「定吉ツとん、あんた、年、なんぼになった？」